夕刊文化

文学周遊

国木田独歩「病牀録」　神奈川・茅ケ崎

独歩が入院していた南湖院は閉鎖され、病舎は1棟だけ保存されている。角の部屋をのぞくと、隣の窓から海が見えた＝三浦秀行撮影

国木田独歩は北海道、関東、中国、九州と、各地に多くの文学碑がある人で、「国木田独歩の文学碑」（1981年）という本によると合わせて26基もあるという。英国の自然詩人ワーズワースに心酔し、暮らした場所、訪れた先々の、風景やそこに生きる人々をたたえる美しい文章を書いたからだ。独歩は土地の魅力を引き出す名人だった。

しかし終の地の茅ケ崎ではそうはいかなかった。

持病の結核が悪化し1908年、当時有名だった南湖院という療養施設に入った。5月のはじめから死ぬ6月下旬までの間に『病牀録』という口述の作を残し、なかで「茅ケ崎は松と麥と桑と甘藷の外、目を慰むるものなし」と難癖をつけて、早世した。

独歩には短気なかんしゃく持ちの不平家と、ロマンチストで道徳家の二面があり、愚い力が出た。人格者で知られた南湖院長の高田畊安でさえ「どちらかと云ふと獰悪氏は吾が儘であつた」と言ったくらいだから相当に勝手放題の入院ぶりだったろう。空気に乾湿の差があるのが病状に合わなかったらしかった。

ところで、茅ケ崎の砂浜まですぐの南湖院のあたりはとてもいい所なのだ。大海原に浮かぶタ雲の味わいは古来変わらないはずだが、病床の独歩には遠かったのか。風の日の、ごうごう繰り返す波の音は独歩がよく感じていた天地悠久の摂理を思わせる。

今の風景も素朴。晴れた休日に行った時は近所の中学生とおぼしき女子3人がリュックを置いて浜を走り回って遊んでおり、カラスがおやつをつついているのにやっと気づいてアーブー言っていた。見ていた散歩のおばあさんが、よく聞こえなかったが、なにか対策を与えているようだった。独歩もこんな場面に出くわしたなら、もっとましなことを言ったに違いない。

戻って駅の観光案内所のパンフレットを見ていたら、近くに茸、開高健が仕事場を構え、茅ケ崎と文学といえばそちらが一番にあがるらしい。仕事場はラチエン通りにあって、サザンオールスターズの「ラチエン通りのシスター」という曲名が浮かんだ。

それでふと思ったのだ。土地を称揚する名人の独歩と茅ケ崎はすれ違ったが、後に現代の名手、サザンがそれをやってくれた。芸術家と出会えたまちは幸いだ。駅では、やはり茅ケ崎を歌った「希望の轍」が発車時に流れる。

茅ケ崎の独歩の碑はゆかりの南湖院ではなく、なぜかサザンのコンサートで有名な野球場にある。独歩が好きだった横河駅から運んだ石で作ってあるのはこのあたりの気風のおおらかさだろうか。

（編集委員　深田武志）

茅ケ崎の空氣は荒し

くにきだ・どっぽ（1871～1908）　千葉県で生まれ山口県で育った。東京郊外の風景に格別の詩趣を見いだした「武蔵野」や、旅先で目にした名もなき人々を印象的に描いた「忘れえぬ人々」などが代表作。教師として暮らした大分県佐伯を舞台にした作品も多く、佐伯には独歩の記念館がある。

「病牀録」は小説家の真山青果による聞き書き。死生観や人物観、芸術観などの断章を連ねた大部の記録で、率直な物言いから晩年の独歩の境地が伝わってくる。独歩は文名ピークの時に死んで文芸誌が追悼の大特集を作るなどし、文学者の死が社会的に大きく扱われる先駆けになった。（作品の引用は「定本国木田独歩全集」学習研究社、写真は国立国会図書館蔵）

文化往来

角野隼斗「かてぃんピアノ」貸し出し

楽器内部が見える「かてぃんピアノ」を弾く角野（東京都港区のスタインウェイ＆サンズ東京）

音楽大学ではなく東大の大学院に進み、配信でブレーク、古今東西の多様な曲をつなげて弾いて音楽の魅力を再発見させる……。ピアニストの角野隼斗（通称かてぃん）は、従来のクラシックの楽者とは違う新しい道を切り開いているが、社会活動でも独自性を発揮している。

「かてぃんピアノ」と名付けた、自らカスタマイズしたアップライトピアノを各地に貸し出す「UPRIGHT PIANO PROJECT」だ。2023年7月～24年1月の第1期に全国17カ所に置かれ、25年6月～26年3月に貸し出す第2期の希望者を、25年5月25日まで募集している。

「ピアノと対話する体験をしてほしい」と角野は話す。「かてぃんピアノ」は、大きな音が出ない代わりに柔らかく美しい音が響くよう調律されていて、鍵盤の上が透明な板になっている。

「弾くと、中がどう動いて音になるのかが見えて面白い。うまいも下手もなく、人前で弾くプレッシャーを感じずに、この楽器でなら自分とピアノだけで対話するような時間を持てるのでは」と角野は期待する。プロジェクトには「Piano for Museum」という副題がついている。

第1期では寺や美術館、高校の音楽祭の会場などにピアノが置かれ、弾く人同士や、弾く人と聴く人の間などに「新たな会話や交流が生まれた」との反響が多く寄せられたという。応募の詳細は「UPRIGHT PIANO PROJECT」（https://cateennp.piano.or.jp/）。

詳細な記事を電子版に▶文化→文化往来